

序

東アジアの文学圏へ

近年、各分野で東アジアの論議が盛んになっているが、日本文学研究では個別には論じられても、いまだ総合的、体系的な次元にはいたっておらず、今後に検討の余地が多く残されている。今後めざすべき方策としては、第一にアジアや欧米の研究者と連携をはかり、相互交流を活発化し、共同研究の機会をできるだけ増やすこと、第二に東アジアの資料群を直接精査し、相互の照応に着目することによって東アジアの文化共有圏における文学の位置を再検証すること、であろう。旧来の国文学は日本主義と結びつき、ナショナルアイデンティティ確立の重要な一翼を担ったが、文学教養主義の失墜にともない、もはや主導的な役割をはたすことができなくなった。極論すれば、文学研究の生き延びる道は「国際と学際」にしかないと考えているが、国際化と学際化の双方は個別にあるわけではなく、おのずと連動しており、常に双方からの学の相対化が指向されなくてはならない。いずれにしても、歴史的、地域的にみて、最もかわりの深い東アジアを視野に入れるのは必須の措置であり、まずはここから始めるほかない。その際、留意すべきはたんに一対一の点と線の対比による差異化ではなく、むしろ重層化し複合化した共有の文学圏としてとらえる方法論であろう。

そのような前提からみて、恰好の対象になるのが『今昔物語集』をはじめとする説話の領域である

と考えられる。拙著『説話の言説』（森話社）などで繰り返し述べているように、「説話」は漢語であり、前近代の東アジアに共有された語彙である。近代に學術用語として再利用され、今またそれも東アジアに共有されようとしている。「物語」がいに和語から逸脱できなかったのに対し、「説話」は東アジア共有の語彙として位置づけられ、再生し復活されようとしている。そうしたあらたな地平からの説話研究がはたす役割は決して小さくないはずである。「説話」は仏典、漢籍など東アジアの聖典（カノン）に即した言説でもあり、同時にそこから逸脱し背反する言説としての面をもあわせもつ両義性をそなえている。聖典とかかわりつつ、同時に周縁に位置する言説群を総合的に検証しうる絶好の媒体であるといえる。

「説話」は今まで説話集を主体とすることでジャンル論として確立されてきた。そのことは「説話文学」という用語によくあらわれているが、同時にそれはあらゆるものを繋ぎとめ、巻き込んでいく媒体（メディア）でもある。いわば、「説話」は世界の〈喩〉としてあり、あらゆるものが「説話」の対象になる。そして、あらゆるジャンル、領域にたらなり、媒介する仲立ちとなる。もはやそれ自体、個別ジャンルの領域を超えている。「メディアとしての説話」への視座が欠かせないゆえんである。「説話」はジャンルではなく、ディスクール（言説、言述）なのである。

したがって、ここでとるべき方向は、説話をジャンル化し、説話集の頂点としての『今昔物語集』を作品論、テクスト論として定位させることではなく、あくまで東アジアの座標からその言説としての意義を読み解いていくことであろう。かつて、近代の説話研究の始発期において、『今昔物語集』は世界に対抗できる国文学として浮上し、高木敏雄、南方熊楠、芳賀矢一、柳田國男等々によって、比較神話学の延長としての比較説話学の次元から読み解かれようとした。しかし、その路線は次第に閉塞し、国

文学の領域に封じ込められていく。戦後の民主主義路線から民俗学が甦生すると、説話も再び脚光をあびるが、一方は説話集ジャンル論に、一方は口承文芸論の補助資料に、と分化していった。

また、説話集ジャンル論においては、作品論、テクスト論において、成立や形成、構成・構造や類型、表現分析などさまざまな方法が模索されたが、結局は日本文学史の一領域としての古典として収まってしまう。というより、和歌・物語など仮名文芸主体の国文学のなかでいかに市民権を得るかに邁進していった。とりわけ、『今昔物語集』研究は一九六〇年代の高揚期と、八〇年代から九〇年代にかけての第二の高揚期とを経て、閉塞、停滞期に入って久しい。成立論は頭打ちで、構成・構造論、表現分析論もはや新しい方向を打ち出す力を持ちえなくなってしまった。その行き詰まりを打開する一つの方策としての東アジアでもあった、といえる。

いうまでもなく、『今昔物語集』は天竺、震旦、本朝という当時の全世界を示す三国観で構成される。今日のアジア世界を包含する、そのことの意味をあらためて東アジアから見直し、「東アジア文学」として位置づけていくことが今後益々もとめられるであろう。もちろん比較論の観点からいえば、東アジアだけに限定する必要はなく、西洋でもアフリカでも、比較は可能であり、多角的な視座を否定するつもりはない。方法論はさまざまに可能であろう。しかし、そのよってきたる基盤として東アジアはまず第一に欠かせないと考えられる。

漢訳仏典にはじまり、聖教類から漢籍、幼学書にいたるまでおびただしい舶載書との直接、間接のかわりをぬいて『今昔物語集』の形成は考えにくい。そうした典籍との関連を従来のような点と点でつなぐ出典考証ではなく、多面的にどのように見ていくか、今後の課題として残されている。

寺院資料の発掘紹介をはじめ、学問注釈研究など近年の著しい研究の変転は、かつての『今昔物語

集』研究が説話研究をリードした方位にはもはやなく、作品論、テキスト論の時代が終わったことを示しているが、その一方で新しい動向をふまえてあらたに既成の古典が読み替えられ、読み直される時代にもなったといえる。それとともに、異分野との競争が盛んになってきて、学際化や国際化が避けがたく進展している。

こうした観点から、すでに『今昔物語集を読む』（吉川弘文館、二〇〇八年）、『アジア遊学』特集「東アジアの文学圏——比較から共有へ」（勉誠出版、二〇〇八年）、『漢文文化圏の説話世界』（中世文学と隣接諸学 1、竹林舎、二〇〇九年）などを編集、上梓した。国際と学際からすれば、前者が歴史、宗教、民俗などの分野からの接近を意図した学際を、後二者が国際をそれぞれ意識した編集ともいえ、そのようなもくろみが成功しているかどうかはさておき、本書はこれらを受け継ぐかたちになっている。いずれ東アジア文学や東アジア学として位置づけられる時代が来るであろう。

本書の構成

本書の構成は、おおきく以下、I「東アジアの〈今〉と〈昔〉を繋ぐ」、II「東アジアの宗教と信仰世界」、III「東アジアの地域とイメージの変成」、IV「東アジアの知と学の往還」、V「東アジア〈予言文学〉の射程」の五部にわかれたる。

Iは、『今昔物語集』を中心に翻訳や表現叙述をふまえて〈予言文学〉との関連をさぐる論である。翻訳論をテキストの方法と異言語との双方向からとらえ直し、〈予言文学〉としての可能性をあらたに

問い直す試み（小峯）にはじまり、震旦部の表現叙述を中心に依拠資料を他者のことばにとらえ、それとの相剋、葛藤の相として追究する精緻な解析（竹村）、説話集としての時間・歴史認識から未来への言説をさぐり、外枠をはめえず物語の内在論理を露呈させた表現構造を読み解く論（千本）へと続く。後二者には期せずして混沌たる現実を漂流する主体の問題が取り出されている。そして、東アジアの毘沙門信仰を軍神から都市の守護神への変転と予言書とのかかわりなどから追究し、『今昔物語集』譚をあらたに位置づける（金文京）。東アジアを軸にすることでここまで豊かに読み替えられることに気づかされ、あらたな研究のステージの到来を体得させるものがある。

IIは東アジアの宗教、信仰の世界を多角的に探求する論を集めた。『今昔物語集』形成期の宗教文化について愛染明王を基軸に中国北方仏教文化史など東アジアを広範に視野に入れて縦横に論じ、神学的な教学論への開展を提示する論（小川）、東アジアの仏法伝来の内実をめぐり仏像の渡来と僧の渡来との差異に着目、これと寺院建立譚の位相を解説する論（松本）、密教僧の加持祈禱譚と法華持経者譚との対比を軸に、物語構想と現実の実教実相とのずれを読み直す論（渡辺匡二）、東アジアの地獄譚の展開相を唐の『冥報記』を軸に追究し、朝鮮半島の金石文なども視野に入れて論ずるもの（李市埜、穀断聖人）の話からその修法や行業を通史的に丹念にたどる論（渡辺麻里子）、物の怪や物忌の語位相を『源氏物語』から『今昔物語集』への展開から読み解くもの（増尾）、人の臨終において障害となる魔のあり方を中世の天狗や霊との対峙法や認識論からあらたに見据える論（伊藤）等々、今後、宗教文化の観点から東アジアに波及させるべき問題もあわせて重厚な論が展開する。

Ⅲは東アジアの世界像やイメージ世界の〈変成〉をかたどる論である。東アジアの世界観の根本にあつた須弥山世界の図像をめぐる最古の敦煌本と室町期のハーバード本の丁寧な比較論(高)、東アジアにひろまる蛇婿入り譚をめぐる芋環型の変成を中心に言語表現の緻密な分析を施した論(馬)、東アジアの虎説話をめぐるイメージと言説を通して、朝鮮・中国観について掘り下げる論(山口)、漢文学における泰山の表現史と信仰をたどる論(吉原)、近世の松浦静山『甲子夜話』の言説から羅生門説話を例に武将の系譜認識や武勇譚の読み方をさぐり、為朝や義経伝承から対外的な認識を論ずるもの(鈴木)、「薩琉軍記」の増広本から琉球に渡つた円珍や為朝譚の変転を通して対外認識を追求する論(目黒)からなる。いずれも地域や世界観に即したイメージの変成や他者としての異国や異境への対外認識などが論じられる。

Ⅳでは東アジアの知と学の相互交流を描き出す。『世俗諺文』の故事成語をめぐり、漢籍仏典との比較を通して漢語の位相を解明する論(河野)、『三宝感応要略録』の出典注記に着目することで『今昔物語集』のあらたな出典考証を推し進める論(李銘敬)、『孝子伝』の「郭巨」説話を中心にその変転を東アジアの領域にひろげて解析、表現の微細な差異の意味を検証するもの(金英順)、月に兎が込められる本生譚について、仏典類を網羅して細部の異同を比較検証し、唱導活動の意義を説く論(司)、ベトナムの漢文説話にみる鬼神譚をめぐる『今昔物語集』『搜神記』などと比較、空間や退治譚から分析する論(オワイン)、そして、中国における『今昔物語集』の研究史の記述(劉)で構成される。文化の〈翻訳〉にもかかわる東アジアの比較説話、考証学が重層的に展開する。

Vは東アジアの〈予言文学〉解説をめざす多様な論である。予言的な機能をもつ童話について、風刺性や神性ともあわせて東アジアの国々の位相差を論ずるもの（金英珠）、『源氏物語』冒頭の有名な高麗人の観相を倭相や宿曜とかさね、相対化させる表現の構図を解析する論（前田）、『曾我物語』や『平家物語』など軍記、歴史物語における予言や予言的性格を持つ夢想譚の機能を物語の指向性や表現の構造として読み解く論（会田）、狐に関する物語や言説の変転を平安期から近世にいたる多様なテキスト群から縦横に読み解き、物語の再生と転生を説くもの（深沢）、漢訳された聖母マリア伝『聖母行実』を中心に「天啓」に関する翻訳など語彙表現の分析を精緻に試み、日中間の差異をはじめ東アジアのキリスト教文学の世界を開拓する論（張）からなる。東アジアに及ぶ〈予言文学〉を指向しつつ、多面的多角的に検証されている。最初の小峯論と最後の張論で〈翻訳〉や〈変成〉の問題として首尾相応するかたちになっている。

以上、『今昔物語集』の専論にはじまり、『今昔物語集』の一説話に端を発して東アジアに世界をひろげて論ずるものや、『今昔物語集』形成期のいわゆる院政期の文化をとらえようとする論、仏教学に深く根ざす論、図像イメージを解析する論、異文化交流や異国、異境認識の論、異言語間の翻訳や変成の論など、まさに今日的な課題を負った多種多様な論が展開する。こうした論の総体がすべて『今昔物語集』から始まり、おおきなうねりとなってあらたな知と学をゆり動かしていく。それらのすべてを包含し、呑み込んでいくのが『今昔物語集』というおおきな運動体のように思える。運動体としての『今昔物語集』とその研究の始まり、という予感をおさえがたい。〈物語力〉ということばの響きを実感させられる。それもまた、ささやかな予知、予見、予測、予言にほかならないかもしれないが、あらたな研

究の胎動への感懐をおぼえる。

本書の成り立ち

さて、本書の成り立ちであるが、二〇一〇年三月、北京の日本学研究センターで開催された国際シンポジウム「東アジアの今昔物語集と〈予言文学〉」を基調とするものである（当日参加できなかったメンバー数名にも執筆を依頼した）。この学会は、北京日本学研究センターの全面的協力と、二〇〇九年度から三年間交付された日本学術振興会科学研究費・基盤B「一九世紀以前の日本と東アジアの〈予言文学〉をめぐる総合的比較研究」（代表・小峯和明）の支援を受けて実現したものである。それと同時に、主要メンバーが長年かかわっている「今昔の会」合宿四十周年を記念するイベントでもあり、さらには北京日本学研究センターの張龍妹教授を中心に刊行された『今昔物語集』の中国語訳（人民文学出版社、二〇〇八年）の出版を記念する会でもあった。

学会参加者のうち日本側は、「今昔の会」のなかでも現在第一線で活躍中のメンバー十数名で構成され、さらに中国側から若手研究者も含めて六名、韓国から一名、ベトナムから一名がそれぞれ参加した。東アジアを課題とするにふさわしい布陣となり、二日間にわたって活発な議論がかわされ、同窓会的な雰囲気も醸しつつ、同時に妥協を許さないシビアな応酬もあり、有益な会となった。三日目には、『今昔物語集』の形成期に対応する遼、金時代の北京周辺の遺跡を見学した。

なお、本書の表紙カバー写真は中国の内モンゴル林東郊外、十一世紀の遼代の名高い慶州の白塔（小峯撮影、二〇一〇年八月）である。周知のように『今昔物語集』震旦部の有力な依拠資料である『三宝感応

要略録』の編者非濁は遼の高僧であり、遼の南京（現在の北京）にいた。西南部の天寧寺の塔や城外の排水溝（遼・金博物館）が当時の面影を残す。遼の北方文化と『今昔物語集』の距離は意外に遠くないと考えている。

「今昔の会」のこと

「今昔の会」は一九六七年、私が早稲田大学文学部に入学した時からすでに存在しており、いつ頃から活動しているかいまだによく分からない、要するに縁起が書けない会であり、そしていまだに存続、活動を続けている会でもある。当初は早稲田大学国文学会の下部組織としての学生研究班のひとつであつたが、次第にそれとは無縁になつていった。その頃からいまだに参加し続けているのは、当時指導者的立場にあつた高橋貢氏と私の二人であり、結局はこの一九六七年を会の起点とせざるをえない。毎回、一話づつ担当を決めて報告、議論する形式で一貫し、かつては毎週開いていたが、二〇〇四年に早稲田大学から立教大学に会場を移してから原則として月二回、隔週のペースで読み進めている。メンバーに制限はなく、来る者は拒まず去る者は追わずの主義で今も変わらず、さまざまなメンバーが集まり、そして去つてゆく集合離散を繰り返して今日に至っている。現在は、立教大学をはじめ、各大学の大学院生が中心で留学生もずいぶん増えてきたのが特徴で、人数は潮の満ち引きのごとく、その時々に応じて増えたり減つたりの波を繰り返している。

私が学部一年生の当初は本朝世俗系の巻二十五から読み始め、最後の巻三十一までいくと、当時は岩波の旧古典大系で読んでいた関係から、仏法系と世俗系を含む第四冊の冒頭の巻十九から折り返し、

延々読み進め、再び巻三十一までいくと、次には世俗系に限定して巻二十二に戻ってまた続き、巻三十一にたどりつき、今度は仏法部を読もうということ、本朝の巻十一から始め、現在巻十三を読んでいるところである。巻二十五から巻三十一までは三巡したことになる。話数がまとまった巻は平均四十話くらいあるから一巻読み通すのに二年はかかる。いつまで続くかわからないが、一方でいつやめてもいいという、こだわりのない思いでもかくこままで続いてきた。そして今もなお、この会で『今昔物語集』を読み返すとまたあらたな発見があり、読むことの際限のなさを再認識させられている。

合宿は、一九六九年八月から始まり、当初はたったの四人で伊豆湯ヶ野で行い、あまりまじめに勉強しなかった記憶がある。当時は大学闘争が熾烈な時期で、紛争を終結させるための大学立法が国会を通過した頃のことだったことをおぼえている。翌年、丹後半島で行った頃から卒論の構想発表を行ったり、それぞれの研究モチーフを語り合うようになった。一九七一年、私の学部卒業の頃、春合宿も行うようになった。以来、春夏欠かさず続けて、合宿では『今昔物語集』を読まず、テーマを決めてシンポジウムをやったり、個人の研究発表もまじえて、中世ゆかりの現地にまつわる報告をしたりで、合宿だけに来るメンバーも少なくない。合宿三十周年は沖繩で行い、三十数人という過去最高の人数が集まった。その後、会はやや収束し、春合宿は二〇〇六年度から中止となった。やがて海外にも目が及ぶようになり、一九九四年八月に初めて海外合宿を韓国で行った。私は幹事役だったが、直前に病気になる、やむなく参加を断念した。その後、二〇〇三年三月にフランスのアルザス日本学研究所で国際シンポジウムを開催、パリでも高等研究院で研究会を開催、ギメ美術館や極東学院でも資料調査を実施した。北京の学会はそれにつぐもので、アジアに関しては日本、韓国、中国と続いたので、その後にめざすのは天竺ということになりそうである。

今昔の会による成果としては、当初の指導者であった国東文麿先生の定年を記念した、国東文麿監修・今昔の会編『今昔物語集地名索引』（笠間書院、一九八九年）、今昔の会三十五周年を記念する小峯和明編『今昔物語集を学ぶ人のために』（世界思想社、二〇〇三年）があり、本書はこれにつぐものとなる。奇しくも、合宿四十周年を記念する国際学会をもとにした、今昔の会四十五周年記念の刊行ということにもなる。

この会がいつまで続くか、それこそ予言はできないが、今まで通りいつ終わってもかまわない主義で続けられればと思う。本書はそうした会のオマージュでもあろうか。

小峯和明

序……………(1)

I 東アジアの〈今〉と〈昔〉を繋ぐ

東アジアの『今昔物語集』——翻訳と〈予言文学〉のことども……………小峯和明 3

〈他者のことば〉と『今昔物語集』——漂う預言者の未来記……………竹村信治 26

『今昔物語集』の「未来」……………千本英史 55

毘沙門信仰による都市伝説と預言書……………金文京 73

II 東アジアの宗教と信仰世界

東アジアからみる院政期日本の宗教文化——北宋新訳経典と明王信仰をめぐって……………小川豊生 97

仏教伝來說話と『今昔物語集』の寺院建立説話……………松本真輔 118

加持祈禱する僧侶たち——本朝仏法部・法宝譚を中心に……………	渡辺匡一	138
東アジアにおける地獄説話の展開——『冥報記』の影響を中心に……………	李市峻	152
穀断の聖考——「穀断聖人持米被咲語」(『今昔物語集』卷二十八第二十四話)をめぐる……………	渡辺麻里子	182
〈物怪〉と〈物気〉——東アジアの視点から……………	増尾伸一郎	211
臨終と魔……………	伊藤聡	242
III 東アジアの地域とイメージの変成		
東アジアの須弥山図——敦煌本とハーバード本を中心に……………	高陽	263
芋環型説話の表現素材の変容とその源流……………	馬駿	285
〈からくにの虎〉をめぐる朝鮮・中国観について……………	山口眞琴	312
平安朝漢文学における泰山・泰山府君の形象……………	吉原浩人	340
松浦静山と〈羅生門の鬼〉説話——『甲子夜話』にみる松浦家の過去と現在……………	鈴木彰	368
〈薩琉軍記〉における渡琉者たち——円珍伝と為朝渡琉譚をめぐる……………	目黒将史	395

IV 東アジアの知と学の往還

源為憲撰『世俗諺文』にみる漢語と漢籍の受容……………	河野貴美子	419
『今昔物語集』諸校注本における『三宝感應要略録』関係説話の出典注をめぐって……………	李 銘 敬	444
東アジア孝子説話にみる我が子の犠牲と孝——「郭巨」説話の変移をめぐって……………	金 英 順	485
『今昔物語集』の兔焼身説話と漢訳仏典の間——語り手の意図について……………	司 志 武	512
ベトナムの漢文説話における鬼神について……………	グエン・ティ・オワイン	536
——『今昔物語集』『搜神記』との比較——……………		
中国における『今昔物語集』研究……………	劉 九 令	566

V 東アジア〈予言文学〉の射程

童話考——日韓の史書を中心に……………	金 英 珠	583
高麗人・倭相・宿曜——相対化される観相……………	前田雅之	602
物語の中の予言——夢合わせと言葉とから……………	会 田 実	630

きつねたちはなにもので、どこからきて、どこへいくのか？ ——「名前」を得ること、もしくは「演技する身体」のアイロニー——	深沢 徹	652
『聖母行実』における「天啓」の表現構造	張 龍 妹	693
あとがき		709
執筆者一覧		712